

第12号

2019年
6月発行

CONTENTS

近世中津の医師と知の枠組み
九州大学 名誉教授

ミヒエル・ヴォルフガング

①～③

「古典芸能における身体—ことばと絵画
から立ち上がるもの—」について
ウエネツィア カワオスカリ大学 教授

ボナベントウーラ・ルベルテイ

国文学研究資料館 副館長

山下 則子 ④～⑤

「くずし字OCR」技術の開発

—美用的な翻刻システムの実現を見据えて—
出版印刷株式会社

情報コミュニケーション事業本部

大澤留次郎 ⑥～⑦

「異分野融合共同研究に参加して」

試練—文理融合研究に挑む—
茨城大学 理工学研究科理学専攻修士課程 2年次

宮崎 将 ⑧

コラム デザインを階層で分類する
—西川祐信画「正徳雛形」—

石上 阿希 ⑨

国際日本文化研究センター 特任助教

「新日本古典籍総合データベース」の
新要素 ⑩

こんな古典籍があった！

—拠点大学古典籍画像紹介—第4回 ⑪

トピックス ⑫

ふみ

「日本語の歴史的典籍の
国際共同研究ネットワーク
構築計画」—ニューズレター—大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国文学研究資料館
古典籍共同研究事業センター

近世中津の医師と知の枠組み

九州大学 名誉教授 ミヒエル・ヴォルフガング

(Wolfgang Michel-Zaitzu)

筆者はもともと東西文化交流における医学を専門としていたが、二十年ほど前に文科省の特定領域研究「江戸のモノづくり」をきっかけに日本の地方における近代化にも興味を抱いた。同時期に大分県中津市の依頼を受け、歴史民俗資料館分館・村上医家史料館の資料の調査、整理に着手した。この作業は二年で終了する予定だったが、文化財の保存に力を入れている中津市は大江医家史料館を創設し、そこに地域の古医家の資料が次々と寄贈、寄託されるようになり、当時の大学院生（現在は大学教員）や地元の有志の方々とともにこの活動を今日まで続けている。

遠隔と近接

幕府の直轄地長崎や薩摩、対馬、福岡、佐賀と比べ、

近世の豊前中津は海外との交流や海外情報の収集という点においては決して恵まれてはいなかった。人もの、情報があふれる長崎街道に繋がる中津街道は周防灘沿岸に約五五キロも続き、西へ行くには山岳地帯を越えなければならぬ。このような地理的制約を受け、中津地方の人々の視線は東へ向いていた。瀬戸内海地域は古来より海上交通で発展し、一種の経済文化圏を形成しており、中津港は、この交通網に組み込まれた拠点であった。大坂に置かれた蔵屋敷は、江戸の上・中屋敷とともに情報収集の場として重要な役割を果たした。しかし海外より国内に目を向けがちな状況でありながら、中津藩は十八世紀中頃からの学問の近代化に敏感に反応し、蘭学の発展に

において歴史的功績をあげることになる。その原動力は藩の周到な政策よりも、イニシアティブを握る個人の知識欲や行動力であった。

医師の養成においても同様の傾向が見られる。城下町の医師の多くは次世代の徹底した育成に力を注ぎ、後継者となる若者を豊後の碩学・帆足万里や三浦梅園の塾、華岡流外科のうちでも傑出した大坂分塾「合水堂」などに送り込んだ。周辺の村医は藩内の医師に学んだが、長崎の通詞・蘭方医で蘭学の草分けである吉雄耕牛から最新の医学を教わった事例も確認できる。また、京都など遠方から招聘された医師により地元の「知的インフラ」整備はさらに進んだ。

地元の書肆

ヨーロッパの修道院や専門工房で行われていた書物の書き写しは活版印刷技術の発明により廃れてしまったが、商業出版が本格化した江戸期の日本では高価な医書や師語録、出島商館医の説明をまとめた阿蘭陀通詞の記録資料など、活字にならない写本の書



図1 池田流痘瘡唇舌鑑図 (中津市村上医家史料館蔵)

き写しが幕末頃まで医学情報の伝播に重要な役割を果たした。また、中津藩の村上、大江、辛島、神尾、深水、田淵、屋形といった古医家に伝わる資料の多くは遊学先で写されたものであり、一部には中津にか残っていないものもある。

江戸期の中津藩は書

籍の市場としては比較的小さかったが、『韓子解詁』、『茶道問書集』、『茶道筌蹄後編問書』、『家相図説大全』、『地理風水家相一覽』、『史記鱗』、『群書一覽』、『高青邱詩集』などの巻末にある「諸国発行書肆」から「梅津寿平」という地元の書肆の存在が判明している。この梅津屋は寛延年間より幕末にかけて書籍の発行と流通に携わっており、その後も大正頃まで本屋としての営業を続けていた。医学関係の出版物としては、これまで本郷正豊の著名な『鍼灸重宝記』(寛延二年刊)および加賀藩校「明倫堂」で学頭を務めた儒学者・新井白蛾の『古易察病伝』(寛政十年序)の二例しか確認できていないが、上述のような書物は中津地方における厚い読者層の証といえるだろう。

広い視野と知的好奇心

近世の医師を所属流派の枠組みで論じる研究者は多いが、古医

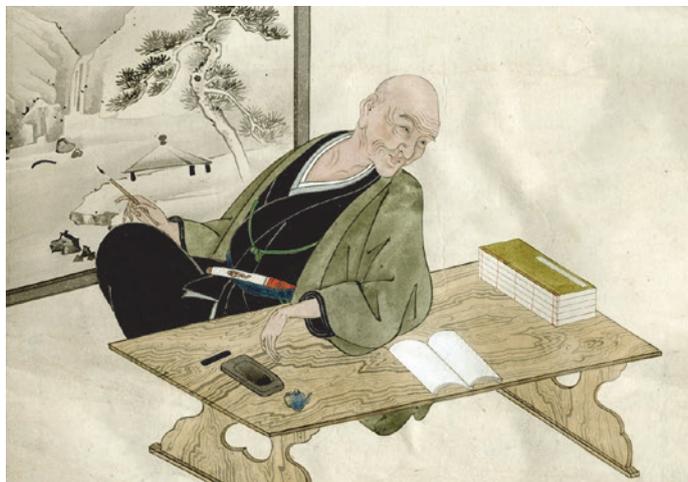


図2 晩年の医師辛島正庵玄快(一六七八～一七六九) (中津市辛島家蔵)

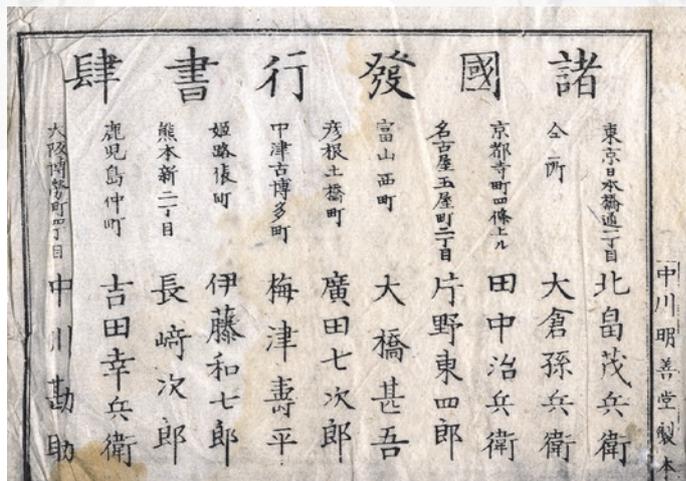


図3 本郷正豊『鍼灸重寶記』(寛延二[一七四九]年刊)に見られる発行書肆(九州大学・ミヒエル文庫収蔵)

夕商館から入った医薬品を処方する古方派の医師や、逆に三稜鏡で細絡刺絡を行ったり、灸を据えたりする蘭方系の医師も珍しくなかった。

地理、歴史、芸能、文学、理学、武術など多岐の分野にわたる書物は、医師たちの広い視野と柔軟な知性の証左である。長崎での検閲をくぐり抜けた漢籍もあった。現物は行方不明であるが、安永七(二七七八)年に御典医・根来東麟の家を訪れた三浦梅園は「未だ天下に流布せざる」物理、天文、測量などの珍書に感銘を受け、それらの書名を「帰山録」に書き記した。

徐發著輯『天元曆理全書』、方以智集・于藻重重訂『物理小識』、羅雅谷(Giacomo Rho)『極西天文』、南懷仁(Ferdinand Verbiest)纂著『靈台儀象志』、湯若望(Adam Schall von Bell)

家の蔵書、治療録、医療道具、薬籠などを調査すると、必ずしも流派に縛られてはいなかったことがわかる。地方の狭い医療業界では、患者が求める確実な治療効果を最優先せざるを得なかったためか、流派の教義を厳守していた例はまれであり、有用と判断されたものは流派の枠を超えて利用された。出島オランダ

家の蔵書、治療録、医療道具、薬籠などを調査すると、必ずしも流派に縛られてはいなかったことがわかる。地方の狭い医療業界では、患者が求める確実な治療効果を最優先せざるを得なかったためか、流派の教義を厳守していた例はまれであり、有用と判断されたものは流派の枠を超えて利用された。出島オランダ

『乾象図説』、利瑪竇(Matteo Ricci)口授・徐光啓筆受『測量法儀』、利瑪竇口授・徐光啓筆受『渾蓋通憲図説』、沈括著『夢溪筆談』、楊慎撰『丹鉛総録』

東麟は長崎の唐通事・盧文二郎と親交があり、これらの書物は安永六年に摘発された唐人屋敷の「抜け穴」を通じて中津に伝わったようだ。

画像情報の公開

遠方より中津の医家史料館を訪れる研究者のほとんどは、二回の調査しか行えない。筆者は月一回程の頻度で資料の整理と調査を進め、その一部を撮影しているが、増え続ける画像ファイルの管理が煩雑で、有用な検索手段もない。国文研の歴史的典籍NW事業は地方における資料への新しいアクセス方法を提供し、国内外の利用者を増やし、研究の高度化と活性化を実現できるに違いない。現時点では予算の都合により、希少で研究価値の高いものを優先的に選別せざるを得ないが、各地域の特徴を伝えるためには地元の情報群全体を公開することが望ましい。技術の進歩によって、少ない経費で維持できるシステムが構築されればありがたい。

地方の医学資料からは、医学史のみならず、宗教史、政治史、社会史、経済史、美術史などの視点から、各地域における近代化、海外情報と物の流布、医師のありかた、知的ネットワークの形成、伝染病(疫病)対策、医薬品と医科器械の流通など多くの分野に跨る問いを解くためのカギを見つけることができる。情報が高速で行き交う現代社会で、様々な研究分野で利用され得るこの貴重な遺産がその価値を発揮することなく埋もれてしまうのを防ぐには、全国各地に保管されている古医家資料や、それに関する情報へのアクセスを極力簡素化することが求められる。

「古典芸能における身体

—ことばと絵画から立ち上がるもの—

について

ヴェネツィア カウフォスカリ大学 教授
ウエネツィア カウフォスカリ大学 教授

ボナベントウーラ・ルペルティ
(Bonaventura Rupert)
やました のりし

国文学研究資料館 副館長

山下 則子

歴史的典籍国際共同研究の二〇一八〜二〇二〇年度共同研究「古典芸能における身体—ことばと絵画から立ち上がるもの—」の目的は、日本古典籍に表現されている古典芸能の身体性に注目して、日本文化の身体性の問題に多方面から迫り、文芸研究の新たな地平を築くことです。抑も古典芸能の研究は、上演の実態を明らかにするために、正本や台帳、評判記や上演記録、民俗芸能の芸態記録などを資料として用いることはありますが、それ以外にも膨大に存在する、芸能から影響された古典籍にまで研究の対象を広げることがあまりありませんでした。本共同研究では、今までの芸能研究では扱われなかった、数多くの日本古典籍を研究対象とすることに特色があり、特に古典籍の絵画性に注目して、「身体」という世界共通の概念を望見し、日本芸能研究者にとってすら高い壁となつている「古典籍を用いた古典芸能研究」を可能とすることを企図しています。

芸能の中でも身体表現に関わるものは、言葉の壁を乗り越えて、万国共通の理解と興味を呼び起こすものです。また、日本古典籍の多くは整版本であるため、挿絵が豊富に存在するという特色があります。芸能の身体表現等が、ことばや絵画で表現された古典籍を紹介し、研究対象とすることは、日本古典籍の新たな切り口と魅力とを、世界に発信することになります。加えて、出版物による傍証

資料が限られる芸能研究にとっても、新たな研究資料の開拓となります。そして本共同研究は、若手研究者の育成を強く意識しています。

二〇一八年度は本共同研究が開始された年ですが、様々な研究活動を行いました。その主な実績は、まずは二〇一八年七月二七日〜二八日、国文学研究資料館開催「第四回日本語の歴史的典籍国際研究集会」で、三人の研究発表を行ったことが挙げられます。まだ共同研究開始から三ヶ月しか経過していないにも関わらず、今後の研究の発展を予想させる意欲的な取り組みでした。発表者や発表題目は以下の通りです。

ボナベントウーラ・ルペルティ ヴェネツィア カ・フォスカリ
大学教授「近松門左衛門の時代浄瑠璃における身体性の問題
—『酒吞童子枕言葉』を中心に—」

マチルデ・マストランジェロ サピエンツァ ローマ大学教授
「話芸における身体」

クラウディア・エアツェッタ ナポリ大学オリエンターレ非常
勤講師「謡曲における身体と季節—植物の精霊物をめぐっ
て—」

内容に深く切り込む質問をいくつも頂き、今後の研究の発展に大いに寄与したと思われれます。

次に挙げられるのは、二〇一八年九月一九日、ミラノ大学セスト・サン・ジヨバンニキャンパス開催「日本古典芸能における身体研究集会」です。ここでも、三人の研究発表が若手中心に行われ、その後研究の進め方に関する話し合いも、若手研究者達を対象に行われました。発表者や発表題目は以下の通りです。

山下則子 国文学研究資料館教授「古典芸能と身体―南北劇と産女―」

ガラ・マリア・フォッラコ ナポリ大学オリエンターレ研究員

「荷風『江戸芸術論』における伝統芸能の力」

ダニエラ・モーロ ヴェネツィア カ・フォスカリ大学博士研究員

「山姥変奏―伝承、古典、能楽から戦後女性文学へ―」

最も問題となったのは、どのような資料を論証に効果的に用いるかという点であり、早稲田大学演劇博物館等の芸能資料の調査方法なども話し合われました。

また、二〇一九年二月一日、国文学研究資料館開催「古典芸能における身体の中間発表及び崩し字講習会」では、二人の研究発表と国文研の太田尚宏准教授による、文書崩し字講習会が行われました。発表者や発表題目は以下の通りです。

ステファノ・ロマニョーリ サピエンツァ ローマ大学博士研究員「ある義民のメディアミックス―話芸における佐倉惣五郎―」

鷺山郁子 フィレンツェ大学教授「筒井筒から井筒へ―平安文学の中世的展開―」

太田尚宏 国文学研究資料館准教授「日本歴史史料(古文書)と崩し字解読―崩し字解読の基礎―」

なお、芸能資料が豊富に存在する演劇博物館等での調査も、研究

会参加のために来日した際に行われました。

当該年度は共同研究開始初年度でしたので、今後は研究の萌芽を伸ばすことが期待されます。特に若手研究者の育成が重要課題であるため、若手研究者の発表機会を多く設定する方針は変わりません。しかし研究歴の永い研究者にとりましても、当共同研究テーマに沿った形で、今までの研究を捉え直す機会となり、シンポジウムや論文等の成果に繋がりました。今後も更にこの研究テーマを進展させていきたいと思えます。

写真は二〇一八年九月一九日、ミラノ大学での研究集会ラウンドテーブルディスカッションの様子。

右から、ダニエラ・モーロ氏、ステファノ・ロマニョーリ氏、マチルデ・マストラランジェロ氏、ボナベントゥーラ・ルペルティ氏、山下則子氏、鷺山郁子氏、クラウディア・イアツェッタ氏、ガラ・フォラッコ氏



「くずし字OCR」技術の開発

―実用的な翻刻システムの実現を見据えて―

明治期における西洋印刷技術の導入は、日本の近代化を後押しした一方、千年以上の積み重ねがある日本語で記された古典籍・古文書の文章を直接読み解くための能力を日本人から徐々に喪失させていった。現在ほとんどの日本人は、わずか一五〇年前に製作された当時の庶民が親しんでいた書物を、読むことができない。明治期の印刷物から変体仮名とくずし字が排除されていった背景には、金属活字という技術的制約からの要請もあったと考えられるが、そうした制約はデジタル技術の発展により克服可能になってきている。明治の創業以来、印刷を生業としてきた凸版印刷にとって、先端技術の活用により何ができ得るか？ を改めて問うことは、必然性の高い課題だと考えている。

「くずし字OCR（光学文字認識）」の開発は、弊社の請負型テキスト制作サービス（つまりは翻刻事業）に付随する取り組みとして、国文学研究資料館との共同研究により二〇一五年に開始した。母体が翻刻事業であるため、自分たちにとっての「実用的な道具」はどのような形をしているべきか？ ということを考える機会が多い。OCRの評価指標の中心は認識精度であるが、精度80%を90%に改善することは基礎研究の立場からは重要な目標だが、現場の感覚としては「どちらにも役に立たない」という評価になる。なぜなら、中途半端な精度のテキストを目視で確認・修正する作業（校正）は非常に負荷が高く、最初から目視による入力をしたほう

が総コストが安いからである。我々の経験則では、OCRによりコスト削減が期待される精度の閾値は95%以上であり「大概の古典籍で精度95%以上」が実現されるまでは、むしろ人力による翻刻を的確にサポートするツールが重要と考えている。

OCR技術の開発のためには、字形の学習データを網羅的に準備することが不可欠である。くずし字OCRの開発にあたっては、歴史的典籍NW事業の一環として制作・公開している字形データセットと弊社が独自に採取したものを合わせて学習データとして使用している。現時点で、日本古典籍くずし字データセットとして公開されている文字は約六十八万文字である。一見膨大に思えるが、出現頻度の低い漢字についてはまだ十分なサンプルが採取できていないとは言えない。我々の実験では、有効な認識精度を実現するためには、一文字種あたり一〇〇〇文字以上のサンプルが必要と試算している。

OCRの中核となる文字認識技術については、弊社の総合研究所が開発したディープラーニングベースのくずし字認識エンジン（以下AI）と公立はこだて未来大学の寺沢憲吾准教授の開発した「文書画像検索システム」を併用している。まずAIにより文字認識し、正解が得られなかった場合は、文書画像検索システムにその場で登録し、次回以降の検索結果には即時反映させるという仕組みになっており、両システムの長所短所を補完する作りになって

情報コミュニケーション事業本部
凸版印刷株式会社

おおさわとめじろう
大澤留次郎

いる(図1)。また、文字を矩形で区切った状態からの一文字認識と
 連綿体の区切り位置を推定する行認識の両モードで動作し、状況

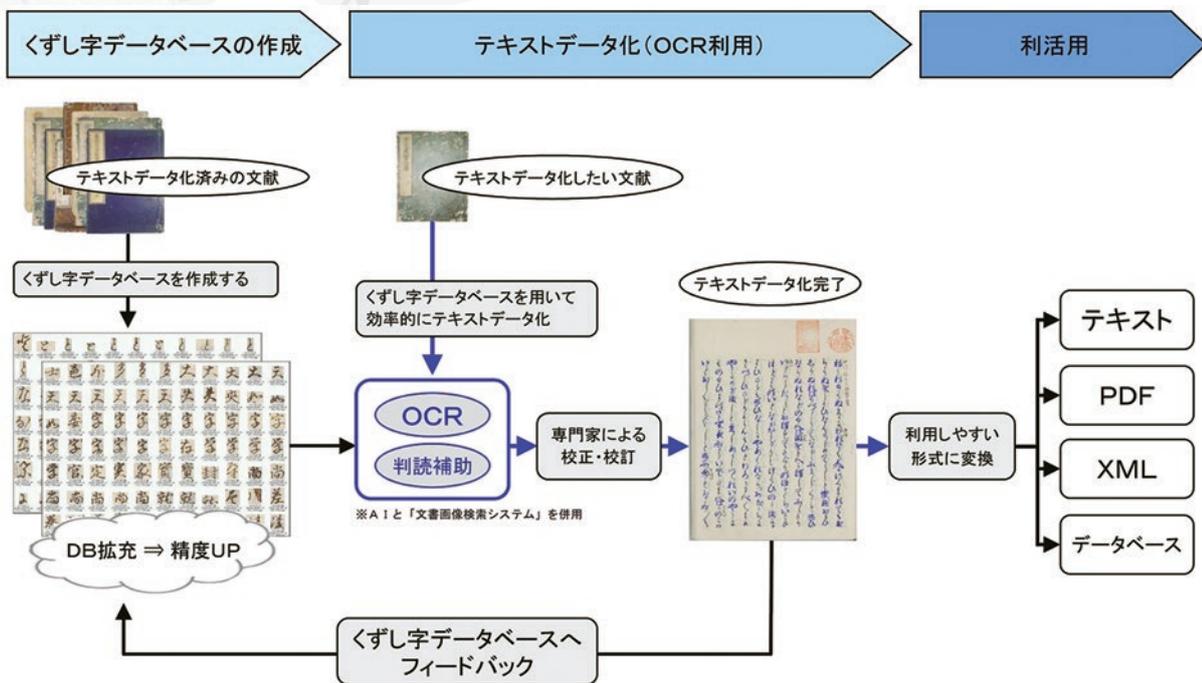


図1 くずし字OCRの仕組み 「源氏物語」国文学研究資料館蔵

トの拡充と文字認識エンジンの改良を継続的に実施しつつ、実際に翻刻または教育の現場で活用しフィードバックを繰り返すことが必須である。今後、フィールドテストを繰り返すことにより、翻刻の効率、作業者のストレス、学習効果等を評価しながらシステムの改良を図っていく予定である。

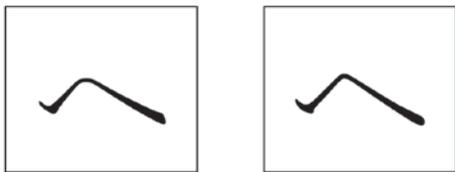


図3 ひらがなの「へ(U+3078)」とカタカナの「ヘ(U+30D8)」

CRの結果をよく見ると、候補文字レベルでは正解に辿り着いているが、一つに絞り込むことに失敗しているケースが多く、文脈に鑑みた確信度補正をすることで精度向上が可能である。ちなみに文字コードが文字の形だけでは決まらず文脈に依存するという性質は、くずし字特有ではなく文字の基本的な性質である(図3)。最後に今後の展望を述べる。「実用的な翻刻システム」の実現のためには、字形データセッ

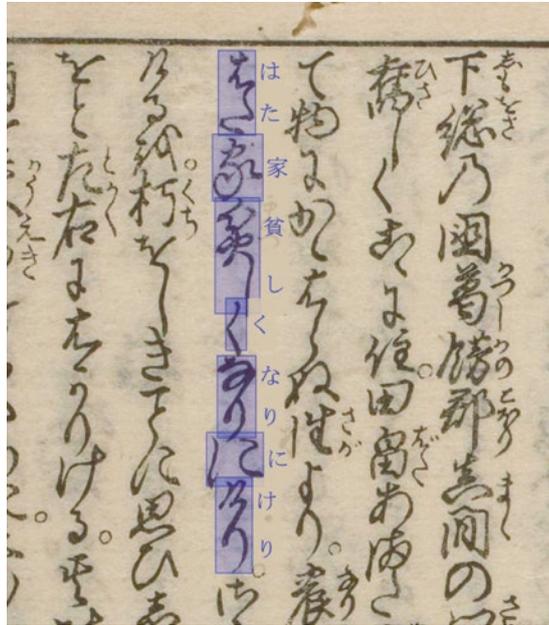


図2 文字認識の結果 「雨月物語」国文学研究資料館蔵

による使い分けが可能となっている(図2)。また、十分な精度の文字認識を実現するためには、文字を形のみではなく文脈も含めて決定することが重要である。O

試練（文理融合研究に挑む）

〔異分野融合共同研究に参加して〕

茨城大学では国文学研究資料館と二〇一七年から共同研究を行っている。共同研究の目的は、「歴史史料を活用した防災及び気候変動適応に向けた研究及び人材の育成」である。

このような背景のもとで、指導教員から卒業研究として、「古文書の天候記録を利用した古気候の復元」を提案された。研究など初めてのことと、研究のけの字も知らない私は、「文理融合して、いって、なんだか楽しそう」という気持ちから、その提案を受け入れることにした。

研究はまず、古文書を探すところから始まった。するとすぐに指導教員の先生から、水戸市の日記「大高氏記録」を紹介された。研究

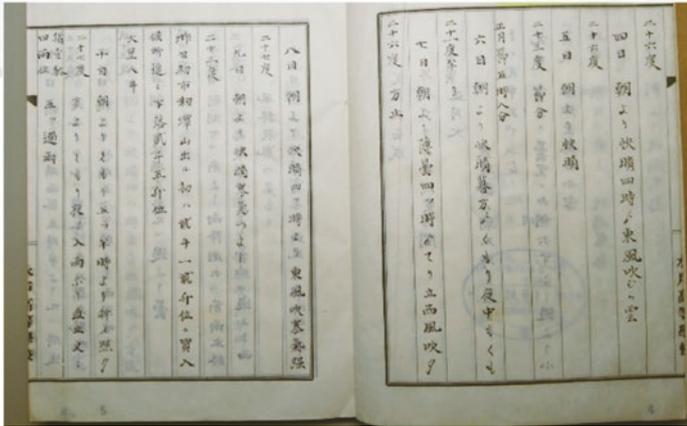


図1 現在研究に使っている日記「大高氏記録」の写本

テーマとそれに使う日記まで用意されるとは、なんとも幸せな学生である。ちなみに大高氏記録は幕末期に書かれた日記で、マイクロフィルムになっっている原本と、明治時代に写された写本が茨城大学に所蔵されている。日記を紹介され、すぐに大学の図書館に向かい、大高氏記録と対面した。そこで、この研究における一つの目の大きな困難に直面する。当時の文書は草書体であり、何が書かれているか全くわからない。私の文字はよくミミズの這った

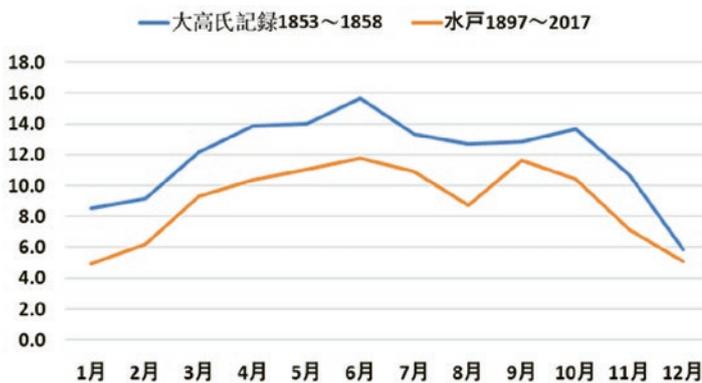


図2 大高氏記録から復元した月別降水日数の平均と気象庁公開の日降水量1mm以上の日数と比較

ような字だと友人たちに笑われたが、これはその比ではない。高校で必死に覚えた過去の助動詞「けり」の活用形など、もはや無意味であった。しかし幸いなことに、写本は苦勞はするが読めそうであった。研究はこの日記と、その後見つけた活字化された土浦の国学者である色川三中日記を使って進めることにした。成果の一部は、「ふみ」第十一号に紹介されている。現在も修士課程の学生として天候記録の解析を続けている。

二〇一九年二月十五日(金)に、第二回共同研究シンポジウムが茨城大学で開催され、私も研究の報告をおこなった。このシンポジウムでは、古文書の保全や調査の話から気候学まで、幅広い分野の話聞くことができた。研究を進めるうえでは、データとして古文書の記録を使っているため、人文学的な考え方が必要である。また、日記の記録は事件を誇張して書かれている場合が多いので、日記の天気記載にも非常に主観が入りやすい。これからは、この記録を定量的に評価することが必要になり、このシンポジウムでは今後の研究につながる意見を得ることができ有意義であった。

茨城大学 理工学研究科理学専攻修士課程二年次

宮崎 将

コラム

デザインを階層で分類する —西川祐信画『正徳雛形』

新しいデザイン、流行のファッションを見たい・知りたいという人の心は今も昔も変わりません。どのメディアからその情報を得るのかという点は時代によって異なりますが、時代を超えて共通する媒体の一つが書物です。

江戸時代には小袖雛形本と呼ばれるファッションブックが出版されてきました。各丁に小袖の背面図と図案の名称、色、染織技法などが記されたものです。最初の雛形本は寛文六年（一六六六）の『御ひいなた』で、それ以降数々の雛形本が出されるなかで、京都の浮世絵師西川祐信と版元八文字屋は「階層別的小袖意匠」という新機軸を打ち出した『正徳雛形』（正徳三年「一七一三」）を出版しました。祐信はその序文で、最近の上層階級の女性たちが流行の小袖だからと遊女が着るような模様を好むことを嘆き、この風潮に対して八文字屋が「今世にもてはやせる風流き模様おもしろもやうの品しなをそれ／＼にわかちてやつかれまがけ。僕おれに画ゑよ」と企画を持ち込んできたと述べています。

その企画意図通り、本書は御所風・御屋敷風・町風・傾城風・遊女風・風呂屋風・若衆風・野郎風と、階層・職業ごとに区切って九六の図案と一八九種の伊達紋を並べています。御所風では、金糸などを用いた刺繍や絞りなど贅沢

な技法を尽くした雛形を、町風では友禅染などの染を多用した雛形を提案しています。小袖の模様には井堰、火桶、いかのぼり、袴など他の雛形本などではあまり見かけない意匠がしばしば使われ、本書の独自性を強めています。

実際、これらの雛形本はどのように読まれていたのでしょうか。雛形本の挿絵や錦絵などには若い女性が雛形本を片手に小袖を注文したり、ねだったりする様子が描かれることがあります。例えば祐信の別の雛形本『西川ひな形』（享保三年「二七一八」）では、雛形本を囲んであれやこれやと話している女性三人が描かれています。ただし、そのように小袖を買えるのは裕福な人々で、多くの人は素敵な図案を眺めて楽しむだけだったのではないのでしょうか。

広領域連携型基幹研究プロジェクト「異分野融合による『総合書物学』の構築」の日文研ユニット「文化・情報の結節点としての図像」では、『正徳雛形』各図の翻刻・語釈を行う研究会を月一回開催し、本書の研究を進めています。



『正徳雛形』遊女風 五十三番・五十四番 国際日本文化研究センター蔵

「新日本古典籍総合データベース」の新要素

すでにカレントアウェアネス(<http://current.ndl.go.jp/node/37779>)

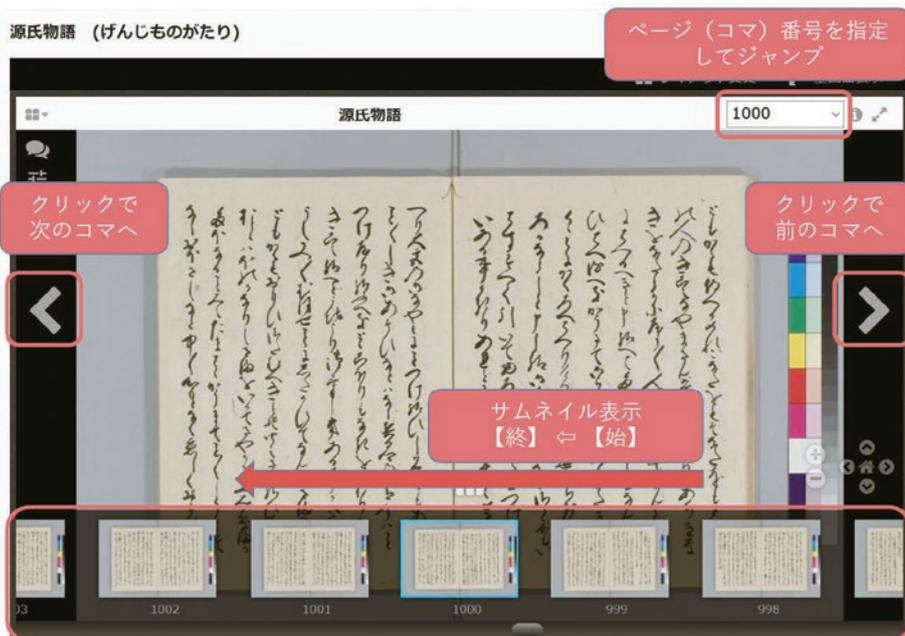
などでも取り上げていただいているので、ご存知の方も多いかと思いますが、去る二〇一九年三月に本データベースに新しい機能が追加されました。主な変更は既報の通り、

- 一 ページ送りが、和書の様式に合わせて「右↓左」になりました。
- 二 サムネイル表示も同じく「右↓左」になりました。
- 三 閲覧するページ(コマ)を指定できるジャンプ機能が追加されました。

となっております。一、二については、これまでと左右逆方向であるため最初は変化に違和感を覚えてしまうかもしれませんが、一般的には、より直観的に操作・閲覧できるようになったと思います。三については、特に大部の古典籍で特定のページを開くのが大変であるということで、これまで何度か指摘いただいていたのですが、これによりいくらか改善されるものと思います。

その他に、特にシステム連携の面でご要望をいただいていた著作IDでの検索にも対応しました。URIの指定にも対応しており、たとえば「<https://kotenseki.nijl.ac.jp/work/2357>」『源氏物語』六八一件(二〇一九年四月現在)が表示されるようになっておりますのでご活用ください。

最後に、本データベースは現在「画像利用」を主眼としており、「書誌」という単位を基本としています。この点、「著作」「書誌」そして「著者」という三つの柱を有する当館の「日本古典籍総合目録データベース」とは非常に大きなちがいであると思います。ご指摘・ご要望をいただく中にはこのちがいに由来するものもあり、十分に対応できないことも多いのですが、上述の著作IDなどのように部分的に対応できる場合もあります。今後もコンテンツの充実をはかるとともに利便性の向上にも努めていきたいと考えています。



画面例: <https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/200010455/viewer/1000>

こんな古典籍があった！〜拠点大学古典籍画像紹介〜第4回

歴史的典籍NW事業では、二〇一五年度から、拠点大学における古典籍の撮影を実施しています。新日本古典籍総合データベースで公開された古典籍から、各大学おすすめの一点をご紹介します。

●東京大学総合図書館所蔵『和蘭全軀内外分合圖（おらんだぜんくないがいぶんどくす）』本木了意（訳）鈴木宗云（編）、刊年不明
DOI : <https://doi.org/10.20730/100273330>

人体図をめくると内臓や骨格が次々と現れる――。まるで仕掛絵本のような本書は、江戸時代、日本で最初に翻訳された西洋の解剖書です。原書はレメリン著『Pinax microcosmographicus』のオランダ語版（一六六七年刊）と言われ、オランダ通詞・本木庄太夫により天和二年（一六八二）に訳出されました。その写本をもとに鈴木宗云が編集し、各訳語を列挙した別冊『験号』と共に明和九年（一七七二）に刊行しました。『解体新

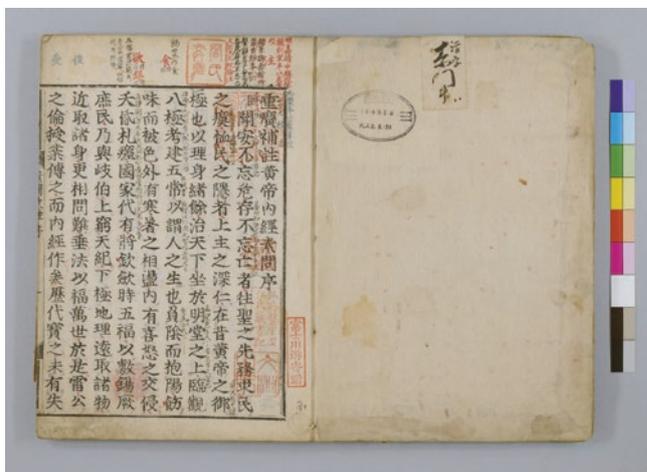


（該当部分を見る : <http://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/100273330/viewer/5>
<http://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/100273330/viewer/13>）

書』にも先行する、日本の解剖学黎明期の貴重な一冊です。

●京都大学附属図書館所蔵『重広補註黄帝内经素問（じゅうこうほちゅうおうていなききよそもん）』王冰（註）、刊年不明
DOI : <https://doi.org/10.20730/100252999>

古活字版の医書の完本。森鷗外の小説でも知られる江戸後期の医師、渋江抽斎が所蔵し、古い注釈の上に、三色の筆で三種の本との校勘を施しています。本書はその後、江戸後期から明治の医師、森立之らの手を経て、『日本医学史』の著者、富士川游博士の旧蔵書である富士川文庫に伝わったことが複数の蔵書印から判ります。こうして、先人が学問に取り組んだ跡とその系譜を目の当たりに迎えることができるのも、デジタル化された画像ならではと言えます。



（該当部分を見る : <http://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/100252999/viewer/5>）

※画像の転載や翻刻掲載などを希望される場合は、利用条件のページ（<https://kotenseki.nijl.ac.jp/page/usage.html>）を必ずご確認ください。

イベント開催予定

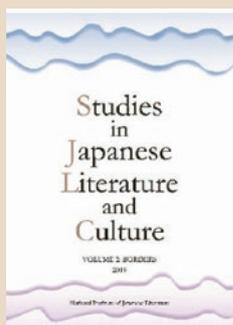
■第五回 日本語の歴史的典籍国際研究集会
 「開催日」十一月十五日(金)
 「会場」国文学研究資料館大会議室
 プログラム等の詳細情報は、ホームページで公開します。

※今年度は開催時期が、これまでの七月末から十一月中旬に変わりました。当館が毎年開催してきた「国際日本文学研究集会」と開催時期を合わせています。

第四十三回国際日本文学研究集会
 十一月十六日(土)～十七日(日)同じ会場にて開催

英文オンライン・ジャーナル第二号刊行

Studies in Japanese Literature and Cultureの第二号「Volume2: BORDERS」を歴史的典籍NW事業のウェブサイトで三月下旬に刊行しました。
<https://www.nijl.ac.jp/pages/cjproject/sjlc.html>



右記URLから全冊がダウンロード可能です。個別の論文のみダウンロードする場合は、各論文のPDFアイコンをクリックすることでPDFファイルをダウンロードできます。また、各論文タイトルをクリックすると、「国文学研究資料館学術情報リポジトリ」の個別の該当ページに移動します。

新日本古典籍総合データベースとジャパンナレッジとの連携

一月十日(木)よりジャパンナレッジ掲載の『角

川古語大辞典』の図版から「新日本古典籍総合データベース」の画像にジャンプ可能になりました。また、四月十日(水)より「新日本古典籍総合データベース」に収録された著作情報を、「ジャパンナレッジ」からも検索できるようになりました。

宮内庁書陵部所蔵資料の画像公開

二月に宮内庁書陵部所蔵の貴重資料42点を新たに新日本古典籍総合データベースから公開しました。特に注目できるのは次の二点です。

○光格天皇・仁孝天皇・孝明天皇の時代の「御譲位並御即位記」をはじめとした近世の宮中の儀式に関する貴重な資料の公開

○孤本(唯一の伝本)とされる「とはすかり」のカラー公開

海外における情報発信

三月二十一日(木)から二十四日(日)にかけて、アメリカ・デンバーで開催されたAAS 2019 Annual Conferenceにおいて、二十三日(土)に当館主催のインフォメーション・ミーティング“Pre-Modern Japanese Books: International Share and Translation of Japanese Codicological Terms”を開催しました。「新日本古典籍総合データベース」の紹介や共同研究の成果等について発表を行いました。

協定書・覚書の締結

- ・皇學館大学 (覚書 三月六日)
- ・野上記念法政大学能楽研究所 (協定書 三月十五日)
- ・大英図書館 (協定書 六月十四日)

ふみ 第13号は、

令和2(2020)年

1月発行予定です。

■表題の背景色は黄櫨染(こうろせん)です。この色は蘇芳を重ね染めた赤みがかった黄褐色で、平安時代以来天皇が儀式に着用する袍(ほう)の色です。即位後初となる宮中祭祀で新天皇が黄櫨染御袍(こうろせん)の(ほう)を着用されました。

■本誌「ふみ」各頁の背景は当資料館蔵の「方丈記」(本阿弥光悦流の書体を模刻した嵯峨本)を利用しています。

■表題「ふみ」の書体は、石川島造船所(現IHI)創業者の平野富二が明治十二年六月に刊行し当館所蔵の「BOOK OF SPECIMENS」(活版印刷見本帳)を利用しています。

ふみ

「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」ニューズレター第12号

〈発行日〉令和元(2019)年6月28日
 〈編集・発行〉

国文学研究資料館
 古典籍共同研究事業センター
 〒190-0014
 東京都立川市緑町十一三
 TEL 050-5533-2988
 FAX 042-526-8883
<http://www.nijl.ac.jp/pages/cjproject/>



「御曹子島渡」がご覧いただけます。携帯電話又はスマートフォンのアプリ等で、左記のQRコードを読み取りご覧ください。